

病理診断困難症例の解説

1. 内分泌細胞への分化を伴う胃腫瘍

桂 奏 先生（京都第二赤十字病院 病理部）

岸本 光男 先生（大津市民病院 検査部）

症例：72歳男性、内視鏡的にIIa様隆起を認めた。

病理所見と経過：生検がされ、組織学的に腸型腫瘍腺管の密な増生を認めた。腺管は不規則な拡張や蛇行を示し、時に乳頭状増生を認めた。上皮は高円柱状細胞主体として少数の杯細胞やパネート細胞が混在しており、核は軽度の偽重層化を示していた。部分的に上皮基底膜側に淡明な細胞が多数見られ、時に細胞質内に好酸性顆粒を認めた。免疫染色上、クロモグラニンAとシナプトフィジンが陽性で、内分泌細胞と考えられた。小細胞癌とするような異型は見られず、全体として内分泌細胞成分の豊富な腺腫と診断し、EMRが施行された。EMR標本は生検と同様の組織所見であった。EMR材料の一部で行った電顕検索では、細胞質内に電子密度の高い分泌顆粒を認めた。

考察：内分泌細胞の豊富な胃の腺腫は比較的まれである。同様の症例で部分的にカルチノイドとしての増生を示す例も経験したので、比較して解説する。